



第1回ポスト2020作業部会参加報告会



主催：国際自然保護連合日本委員会
共催：日本自然保護協会、生物多様性わかものネットワーク
協力：環境省

この報告会は地球環境基金の助成を受けて開催します

本日の進行

<基調報告>

国際自然保護連合日本委員会 道家哲平



<参加者からの報告>

環境省

生物多様性わかものネットワーク

国連生物多様性の10年市民ネットワーク

国立環境研究所

中澤圭一

島田ゆり子・矢動丸琴子

宮本育昌

亀山哲 石田孝英

<質疑応答 意見交換会>



にじゅうまるプロジェクト



にじゅうまる宣言をする

- 今、世界で注目される生物多様性とは
- にじゅうまるNEWS



にじゅうまる活動を調べる

- 生物多様性を守る愛知ターゲットとは
- にじゅうまる国際会議レポート

お問い合わせ サイトマップ

- 愛知ターゲットを達成するためのにじゅうまるプロジェクト
- 運営団体

にじゅうまるプロジェクトのゴールまで、あと **05** 年 **02** 月 **18** 日

登録団体数 **242** 登録事業数 **329**

2015年10月14日 現在

平成27年度 **日本自然保護大賞**

賞状授与式 2015年9月30日

- 環境省自然部門
- 農水省自然部門
- 国土交通省自然部門
- 経済産業省自然部門
- 文部科学省自然部門
- 国土・建設省自然部門
- 国土・建設省自然部門
- 国土・建設省自然部門

にじゅうまるプロジェクト 公式Facebookページ

生物多様性保全の新たな潮流 京都府環境部

おりがみアクション Let's Origami Action

田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト

新着情報

にじゅうまる宣言をする

にじゅうまる活動を調べる

お問

今、世界で注目される生物多様性とは

生物多様性を守る愛知ターゲットとは

にじゅうまるNEWS

にじゅうまる国際会議レポート

運営団体

- 今、世界で注目される生物多様性とは
- 生物多様性を守る愛知ターゲットとは
- 愛知ターゲットを達成するための生物多様性の主流化に向けた



bd20.jp をご覧ください

ポスト2020作業部会 報告

生物多様性の世界目標は、どう構想されているか

国際自然保護連合日本委員会 事務局長
(日本自然保護協会) 道家哲平

本日のテーマ

愛知目標（生物多様性戦略計画 2011-2020）に変わる世界目標の検討 状況

そもそも、
愛知目標を
見たことありますか？

愛知ターゲットとは 生物多様性を守るための 今後10年間の方向性

COP10の最大の成果の一つが「生物多様性条約戦略計画2011-2020（通称、愛知ターゲット）」です。
これは、生物多様性条約の今後の方向性を定めたもので、2020年までに達成すべき20の目標を定めています。



「20 to Jishu Maru Project」は愛知ターゲット実現に向けて「にじゅうまるプロジェクト」を推進しています。

2050年までに自然と共存する社会の創造を目指しながら、2020年までに生物多様性の意味と価値を
全ての人が理解し、社会の常識となり、生物多様性の損失を止め、回復力のある生態系を確保する。



原文（英語）をIUCN-Jで簡略化しています。
詳しく知りたい方は、にじゅうまるプロジェクトウェブサイトへ <http://bd20.jp/>



■ 20の個別目標【Target】

戦略目標A. 生物多様性を主流化し、生物多様性の損失の根本原因に対処。

- 目標1：生物多様性の価値と行動の認識
- 目標2：生物多様性の価値を国・地方の計画に統合、国家勘定・報告制度に組込
- 目標3：有害な補助金の廃止・改革、正の奨励措置の策定・適用
- 目標4：持続可能な生産・消費計画の実施

戦略目標B. 直接的な圧力の減少、持続可能な利用の促進

- 目標5：森林を含む自然生息地の損失を半減→ゼロへ、劣化・分断を顕著に減少
- 目標6：水産資源が持続的に漁獲
- 目標7：農業・養殖業・林業が持続可能に管理
- 目標8：汚染を有害でない水準へ
- 目標9：侵略的外来種の制御・根絶
- 目標10：脆弱な生態系への悪影響の最小化（2015）

戦略目標C. 生態系、種及び遺伝子の多様性を守り生物多様性の状況を改善

- 目標11：陸域の17%、海域の10%を保護地域等へ
- 目標12：絶滅危惧種の絶滅・減少が防止
- 目標13：作物・家畜の遺伝子の多様性の維持・損失の最小化

戦略目標D. 生物多様性及び生態系サービスからの恩恵の強化

- 目標14：自然の恵みの提供・回復・保全。
- 目標15：劣化した生態系の15%以上の回復を通じ気候変動緩和・適応に貢献
- 目標16：ABSに関する名古屋議定書の施行・運用（2015）

戦略目標E. 参加型計画立案、知識管理と能力開発を通じて実施を強化

- 目標17：国家戦略の策定・実施（2015）
- 目標18：伝統的知識の尊重・主流化
- 目標19：関連知識・科学技術の改善
- 目標20：資金資源を顕著に増加

実際、締約国会議（COP）で
決まった愛知目標はどのようなものか、
みてみよう



愛知目標 (生物多様性戦略計画2011-2020) の構造



CONFERENCE OF THE PARTIES TO THE
CONVENTION ON BIOLOGICAL DIVERSITY

Tenth meeting
Nagoya, Japan, 18-29 October 2010
Agenda item 4.4

DECISION ADOPTED BY THE CONFERENCE OF THE PARTIES TO THE CONVENTION ON BIOLOGICAL DIVERSITY AT ITS TENTH MEETING

X/2. *The Strategic Plan for Biodiversity 2011-2020 and the Aichi Biodiversity Targets* *The Conference of the Parties,*

Recalling its decision IX/9, in which it requested the Working Group on Review of Implementation, at its third meeting, to prepare, for consideration and adoption by the Conference of the Parties at its tenth meeting, a revised and updated Strategic Plan including a revised biodiversity target,

Welcoming the submissions by Parties and observers providing views on the updating and revision of the Strategic Plan and the various consultations that have been convened by Parties, the Secretariat of the Convention on Biological Diversity, the United Nations Environment Programme, the International Union for Conservation of Nature (IUCN) Countdown 2010, and other partners, including regional consultations, the Informal Expert Workshop on the Updating of the Strategic Plan of the Convention for the Post-2010 Period held in London from 18 to 20 January 2010 and the sixth United Nations/Norway Trondheim Conference on Biodiversity, held in Trondheim, Norway, from 1 to 5 February 2010,

Expressing its gratitude to the Governments of Belgium, Brazil, Egypt, Ethiopia, Germany, Greece, Ireland, Japan, Kenya, Norway, Panama, Peru, Sweden, and the United Kingdom for hosting these consultations, as well as for their financial contributions,

Welcoming also the participation of various bodies of the United Nations system, convened through the Environmental Management Group, and of the scientific community, convened through DIVERSITAS, the Inter-Academy Panel of the National Academies of Science and other channels,

Recognizing that the Strategic Plan for Biodiversity 2011-2020 represents a useful flexible framework that is relevant to all biodiversity-related conventions,

Noting with concern the conclusions of the third edition of the Global Biodiversity Outlook, which confirm that the 2010 biodiversity target has not been met in full, and also *noting* that the Outlook assesses the obstacles that have prevented the target from being met, analyses future scenarios for biodiversity and reviews possible actions that might be taken to reduce future loss,

Welcoming also the reports of the study on The Economics of Ecosystems and Biodiversity,

1. *Adopts* the Strategic Plan for Biodiversity 2011-2020, with its Aichi Targets, annexed to the present decision,

In order to minimize the environmental impacts of the Secretariat's processes, and to contribute to the Secretary-General's initiative for a "Neutral UN, this document is printed in limited numbers. Delegates are kindly requested to bring their copies to meetings and not to request additional copies.

本体決定部分

- 付属書の“採択”
- 付属書の実施に向けた合意事項

付属書 1

- 愛知目標（戦略計画）本体
- 背景、ビジョン、ミッション、ゴール、ターゲット、実施手段などの目次と本文

両方をもって、国際的に意味を成す（機能する）文書

- 人と自然の共生する世界（2050年ビジョン）に向けて、
- 地球規模、国家規模、地域規模で、
- 多様な主体（国連、国際機関、政府・自治体・企業・科学者・NPO・ユース・市民・農家・林業家・漁師・・・）がそれぞれの立場で
- 生物多様性・自然の恵みを守り・向上させ、賢明に利用し、公正に利益を分かち合うための行動を
- 分かりやすく 20に単純化し、2020年までの目標としてまとめあげたもの
- この目標達成に向けて、195カ国の政策の方向性を変えた文書

第1回ポスト2020作業部会

- 会議の概要

ポスト2010の時はなかった、検討プロセス

- 会議の成果

- 成果の解説



第1回ポスト2020作業部会の概要

- The First Open-ended Working Group on the Post-2020 Global Biodiversity Framework (1st OEWG)。「ポスト2020 生物多様性世界枠組みに関する公開作業部会」が直訳。日本語で省略するなら「ポスト2020作業部会」
- 2019年8月27日－30日 ケニア・ナイロビにある国連環境計画 (UNEP) 本部会議場にて開催
- 521名参加 (政府が半数、国連機関・国際機関・NGO・先住民地域共同体・ユース・女性グループ・企業などオブザーバーが半数)

生物多様性条約における作業部会 (Working Group) とは、非常設で、COPの決定に基づいてひらかれる会合をさす。類似のものは、先住民の知識に関する8(J)作業部会など。



会合開催の経緯

- 愛知ターゲットを検討したとき（2008-2010）には、作られなかった特別な作業部会

なぜ、新しいプロセスを作ったのか？

- ポスト愛知が重要、必要な協議時間を確保することが大事。そのために、設置が合意されたと考えられる。
- OEWGの進め方（ポスト2020の議論の進め方）と、ポスト2020の内容の両方を検討していく。
- OEWGの進め方には、別の会議体（科学技術助言補助機関、条約の実施に関する補助機関、その他の会議体）に、検討をお願いすること、なども含む。

ポスト2020の検討プロセスで大事なこと (COP14/34の主な中身)

- 参加型を重視
- 特別作業部会で検討（カナダとウガンダから共同議長）
- プロセスの普及啓発のためのハイレベルパネル（設置予定）
- 多様な関係者（*）を対象にしたり、参画したりする準備プロセスや、テーマや地域別ワークショップの開催等を通じて検討を進めることを呼びかけ
- 2020年の国連総会で首脳級会合を実施
(下線は、COP10ではなかったプロセス)

にじゅうまるプロジェクト/国際会議レポート/COP14/ポスト2020プロセスの合意を参照。
<http://bd20.jp/2018-11-29-1/>

付属書：ポスト2020生物多様性地球枠組みの準備プロセス

PREPARATORY PROCESS FOR THE POST-2020 GLOBAL BIODIVERSITY FRAMEWORK (COP14/34)

- プロセスの基本原則：基本原則の確認
- 準備プロセスの構造：会議体や他の会合との関係
- 協議プロセス：重層的で、ボランタリーなものも関係する協議プロセス
- 検討文書：ポスト2020の構造や範囲、SMARTな指標、多岐にわたる要素を検討
- 主要な情報源：国別報告書、生物多様性国家戦略、GBO5、IPBESのビジョン2050のシナリオ
- コミュニケーション・アウトリーチ：戦略（COP14別決定）の活用とハイレベルパネルの設置

【参考】多様な関係者とは？

- 先住民地域共同体、国連機関、国連プログラム、他の多国間環境協定、準政府・地方自治体、政府間機関、NGO、女性グループ、ユース、ビジネスと金融コミュニティ、学術研究機関、宗教団体（Faith based organization）、生物多様性に関係したり依存するセクターの代表、多くの市民、他のステークホルダー（COP14/34 パラ6）

【参考】検討過程の重要原則 (COP14/34)

- 「参加participatory」
- 「包摂inclusive」
- 「包括comprehensive」
- 「変革transformative」
- 「触発 (catalytic) 」
- 「知識ベースknowledge base」
- 「透明性transparent」
- 「反復性iterative (何度も意見を往復。合意と当事者意識) 」
- 「ジェンダー配慮Gender Responsive」
- 「視認性Visible」
- 「柔軟性Flexibility」 下線はCOPで新たに追加された原則



ポスト2020作業部会の役割

- COP14決定事項に基づいた、ポスト2020
検討プロセスを提案する
- ポスト2020の具体的な構造（目次）・言葉
/目標などを協議し、COP15に提案する



ポスト2020作業部会以外のプロセス

- コメント募集 (Submission) — COPやOEWGの要請に基づいて、CBD事務局が、意見照会を実施。関係者は、**書面での意見を提出**する
- 地域コンサルテーション — アジア太平洋、西ヨーロッパなどの**地域ブロックごとの協議**
- テーマ別コンサルテーション：里山、海洋など、テーマごとに企画される**協議**。CBD事務局が主催したり、国連大学が主催するなど様々
- その他の国際会議：国際機関/国際NGO等が行う**ワークショップや、シンポジウム**など
- IPBESのグローバルアセスメントレポート（2019年5月発表）や、地球規模生物多様性概況第5版（2020年5月発行予定）などの、**報告書**

第1回ポスト2020作業部会の成果

- 会議の概要

- 会議の成果
プロット完成

(次は、具体的な文章を提案するフェーズ)

- 成果の解説



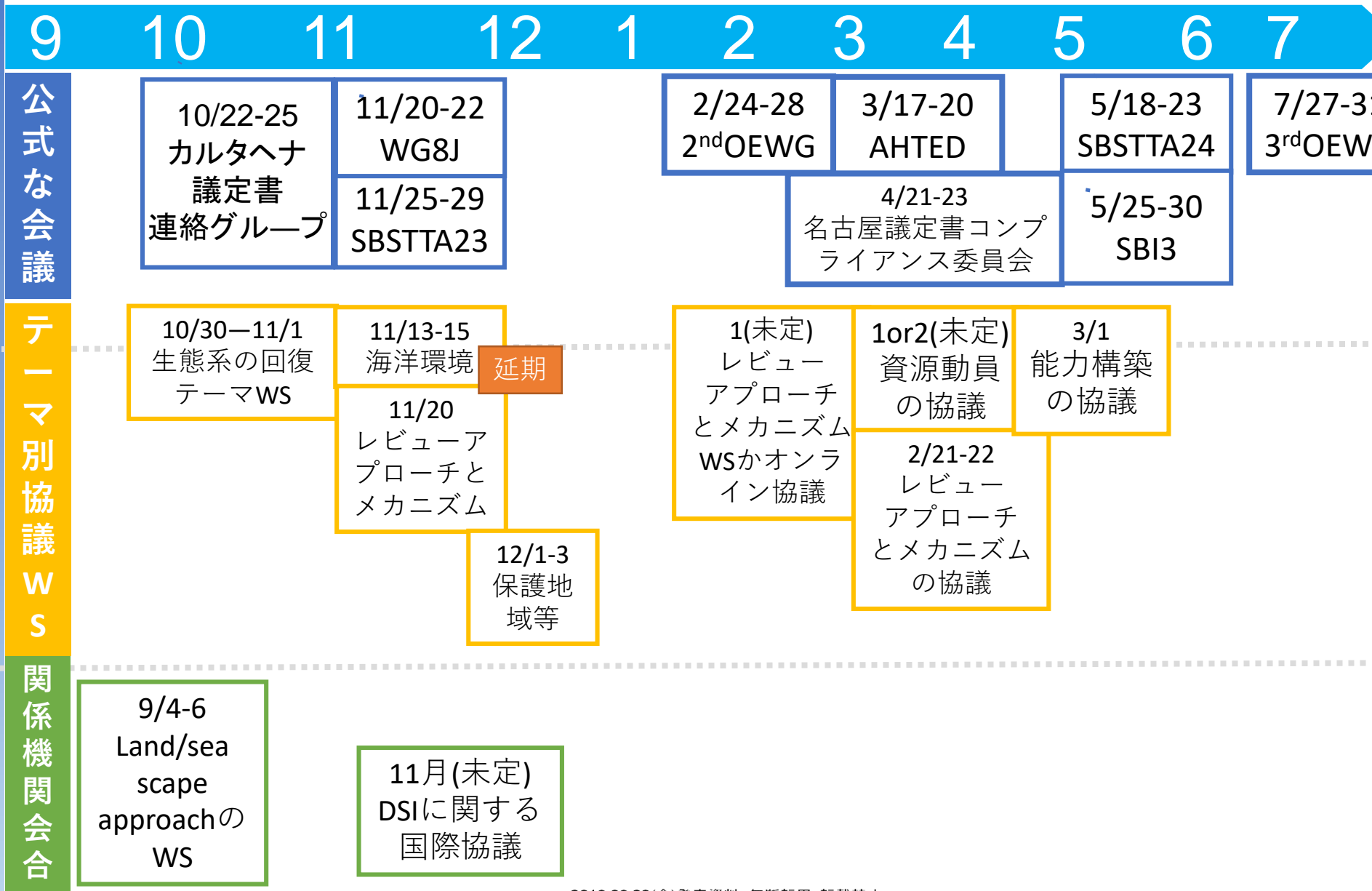
第1回ポスト2020作業部会の成果 一つの文書 + 2つの付属書を採択

- 付属書 1 (**配布資料**) を元に、ポスト2020枠組みを構築
- 科学技術補助機関会合 (SBSTTA) や条約の実施に関する補助機関 (SBI)、伝統的知識の保護に関する 8 (J) 関連作業部会との連動を確認
- 第2回ポスト2020作業部会 (2020.2@昆明) の6週間前に**ゼロドラフトの作成**を共同議長と事務局に依頼
- ゼロドラフトの前に、11月24日に行われる 8 (J) やSBSTTAの前に非公式な説明 (Informal Briefing) を共同議長に指示
- ポスト2020の構造について、9月15日を締め切りとした、パブリックコメントの機会を作るよう事務局長に要請
- テーマ別協議については、既存の会合を留意しつつ、テーマ別会合のコンセプトや役割等をCBDの目的にバランスよくカバーするように、COPビューロと共に、OEWG議長と事務局に対して、見直していくことを要請

スケジュール (暫定) -annex2

2019年

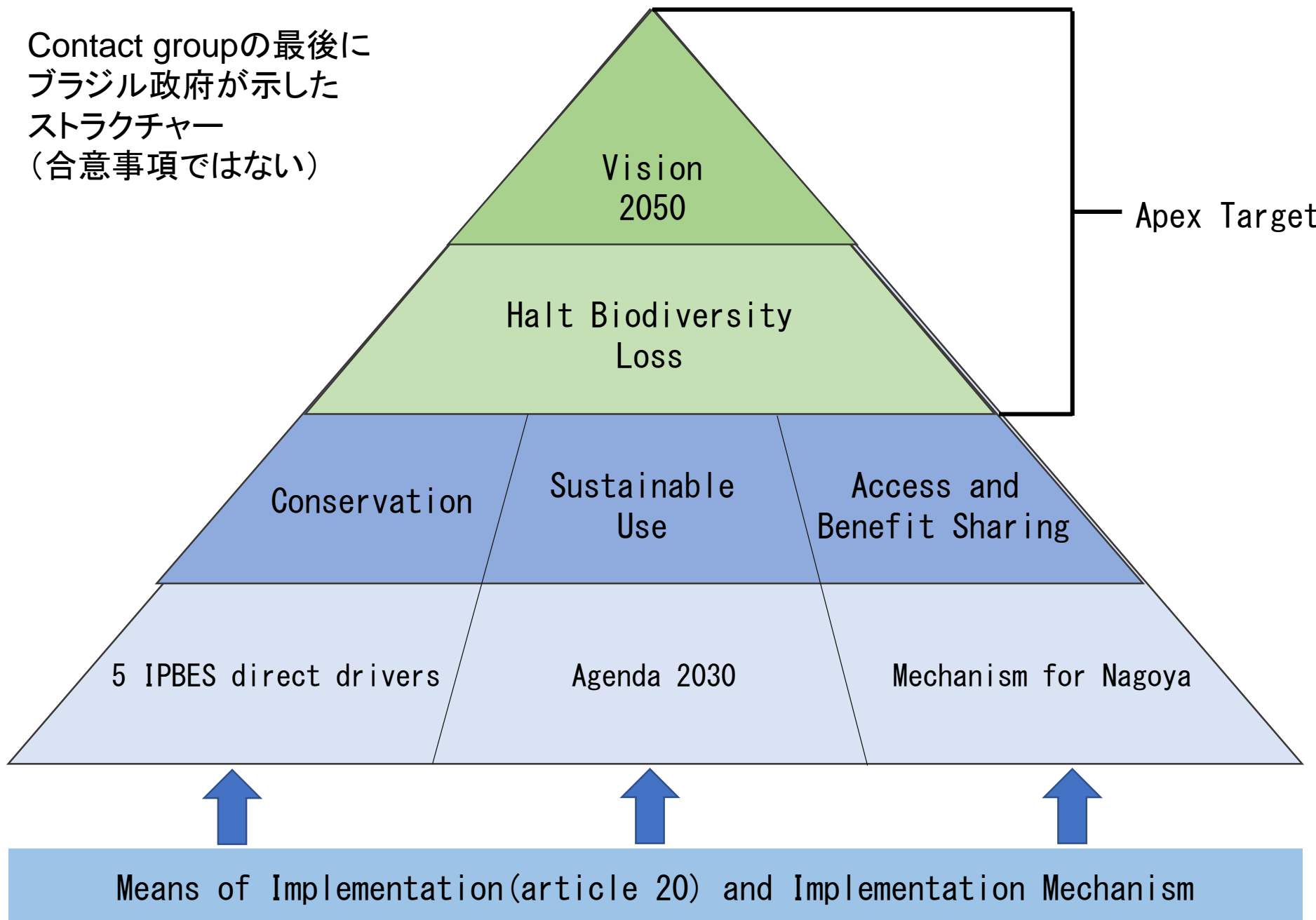
2020年



交渉のポイント

- “「目標の意欲度」と、「実施を支える仕組み（資源動員戦略、技術移転、能力養成）の確保」は、パッケージである”、というアフリカ諸国の主張
- 付属書 I は、“合意文書”ではない。入れたい（入れる可能性がある）要素を書き込んだ。
- 生物多様性の保全、持続可能な利用、遺伝資源から得られる利益の公正衡平な配分に、バランスよく取組む → テーマ別協議のテーマ設定が、保全に偏っているという主張。多くのテーマ別会合があるが、どう参加を確保するか
- プロセスそのものの普及啓発（ハイレベルパネル）の議論は、どこに行った？
- 途上国から、ポスト2020のイメージが提案

Contact groupの最後に
ブラジル政府が示した
ストラクチャー
(合意事項ではない)



第1回ポスト2020作業部会の成果

- 会議の概要

- 会議の成果

- 成果の解説

成果文書の読み方

注目したい動き



1. 成果文書の読み方 愛知ターゲットとの比較で見えてくる 「新しさ」

<愛知目標>

- 戦略計画の目的
- 背景 (Rationale)
- 2050ビジョン
- 2020ミッション

- 戦略目標と愛知生物多様性ターゲット

- 実施、モニタリング、レビュー、評価
- 支援メカニズム

<ポスト2020GBF>

- 対象 (Scope)
- 背景
- 2050年ビジョン
- 2030ミッション、大目標 (apex goals) 、マイルストーン
- ゴール、ターゲット、サブターゲット、指標
- 実施の手段と条件整備
- 横断的課題とアプローチ
- 透明性のある実施、モニタリング、報告メカニズム
- アウトリーチ、普及、理解の向上

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

愛知ターゲットとの比較 背景説明

＜愛知目標＞

- 生物多様性と生態系サービスの重要性
- 現状と人への影響、MDG s
- 生物多様性が直面する課題に意欲的取り組む必要性（Tipping Point）
- 生物多様性の損失の直接要因と背景要因、根本的变化、
- 実施の課題（資金的、人的、技術的不足、不十分な科学的知見、）
- GBO3の結果

＜ポスト2020GBF＞

- 生物多様性と生態系サービスの重要性、（防災・減災含む）
- 現状と人への影響、（SDG s）
- 生物多様性が直面する課題に意欲的取り組む必要性、（Transformative Change）
- 生物多様性の損失の直接要因と背景要因、根本的变化、
- 変化の理論（*）、原則（*）、
- 実施の課題、
- IPBES等の結果

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

愛知ターゲットとの比較 ビジョン

<愛知目標>

- ビジョンの記述のみ（1段落だけで構成される章）

<ポスト2020GBF>

- 2050年ビジョンの妥当性
- （2050年ビジョンと続く文章とが連動すること）
- 2050年ビジョンに向けた2030年を超えたタイムフレーム
- 2050年ビジョンに至る要素（*）

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

愛知ターゲットとの比較 ミッション

<愛知目標>

- ミッションの記述のみ（1段落だけで構成される章）

"take effective and urgent action to halt the loss of biodiversity in order to ensure that by 2020 ecosystems are resilient and continue to provide essential services, thereby securing the planet's variety of life, and contributing to human well-being, and poverty eradication. To ensure this, pressures on biodiversity are reduced, ecosystems are restored, biological resources are sustainably used and benefits arising out of utilization of genetic resources are shared in a fair and equitable manner; adequate financial resources are provided, capacities are enhanced, biodiversity issues and values mainstreamed, appropriate policies are effectively implemented, and decision-making is based on sound science and the precautionary approach."

<ポスト2020GBF>

- 2030年の生物多様性の状態に関する表明
- 望ましい変化に関するAction orientedな記述
- マイルストーン（*）、
- 条約の3つの目的と議定書、
- 2050年ビジョンに書かれている要素に基づいて設定（*）、
- 持続可能な利用、持続可能な消費と生産（*）、持続可能な開発目標（SDGS）（*）、生物多様性の損失に取り組む、
- 気候変動への効果的な適応、
- 「シンプルでコミュニケーションしやすく、行動可能で、測定可能という表現」
- （D）PSIRモデル

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

NGO等が提案した幾つかのミッション案

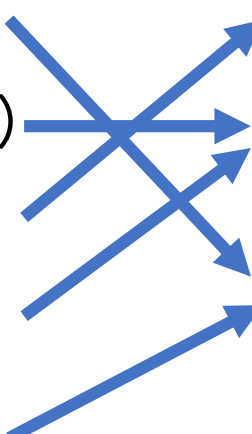
- **“Halt the loss (種や生態系損失を食い止める) of species, ecosystems and genetic diversity by 2030; restore and recover biodiversity to ensure a world of people “living in harmony with nature” by 2050”** IUCN position paper
- **“Halt further net loss (更なる全体損失を食い止める) of ecosystems by 2030, towards restoration and recovery of ecosystems by 2050”** IUCN position paper
- **“By 2030, halt the loss of biodiversity and put nature on a path to recovery (自然を回復の道筋へ) for the benefit of all people and the planet”** WWF 4月意見

愛知ターゲットとの比較 ゴール

<愛知目標>

- 5つのゴール（戦略目標）のもとに、20のターゲット目標

DPSIRモデルに準拠

- 背景要因（Driver）
 - 直接要因（Pressure）
 - 状態（State）
 - 影響（Impact）
 - 対策（Response）
- 

<ポスト2020GBF>

- ゴール、ターゲット、サブターゲット、指標

下から上へのロジック構造

- 状態（State）
- 危機への対処（Response to Threat）
- 条件整備（Enable Condition）

* 愛知目標をベースに検討

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

愛知ターゲットとの比較 ゴールその他

＜ゴールに影響与える要素＞

- IPBESグローバルアセスメントに記載された5つの生物多様性の損失要因（土地や海の利用＞直接利用＞気候変動＞汚染＞外来種）

＜サブターゲットに影響与える要素（*）＞

- ターゲットのより具体的な要素に取り組むもの

＜指標に影響与える要素＞

- 指標は、ポスト2020枠組みのターゲットと同時に特定されるべき。

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

(新要素) 実施手段と条件整備

- 資源動員、資金の提供、資金メカニズム、能力養成、伝統的知識や慣習的持続可能な利用、科学や教訓、科学的技術的協力や技術移転、知識創出・管理・情報共有、コミュニケーションと普及啓発、他の環境協定との相乗効果の促進、先住民地域共同体等のステークホルダーのさらなる参画、科学に基づく標準化された手法・自然資本会計（*）・自然の価値に関する全体的アプローチ、環境ガバナンスの強化や政策プロセス（*）、生態系に基づく管理、生物多様性国家戦略および行動計画、根本的な変革のレバー

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

(新要素) 横断的課題/アプローチ

- 主流化、ジェンダー平等・女性の支援 (Empowerment) ・ジェンダー課題に応答するアプローチ (Gender responsive Approach)、先住民地域共同体、権利ベースアプローチ、パートナーシップ、世代間公平 (Intergenerational equity)、連結性 (Connectivity)

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

愛知ターゲットとの比較 実施

＜愛知目標＞

- 実施、モニタリング、レビュー、評価
- 実施手段（資源動員、NBSAPと国別目標設定、参加、名古屋議定書やカルタヘナ議定書との連動）
- 作業計画、政治的な指示の拡大、パートナーシップ
- 政府による報告
- COPでの評価

＜ポスト2020GBF＞

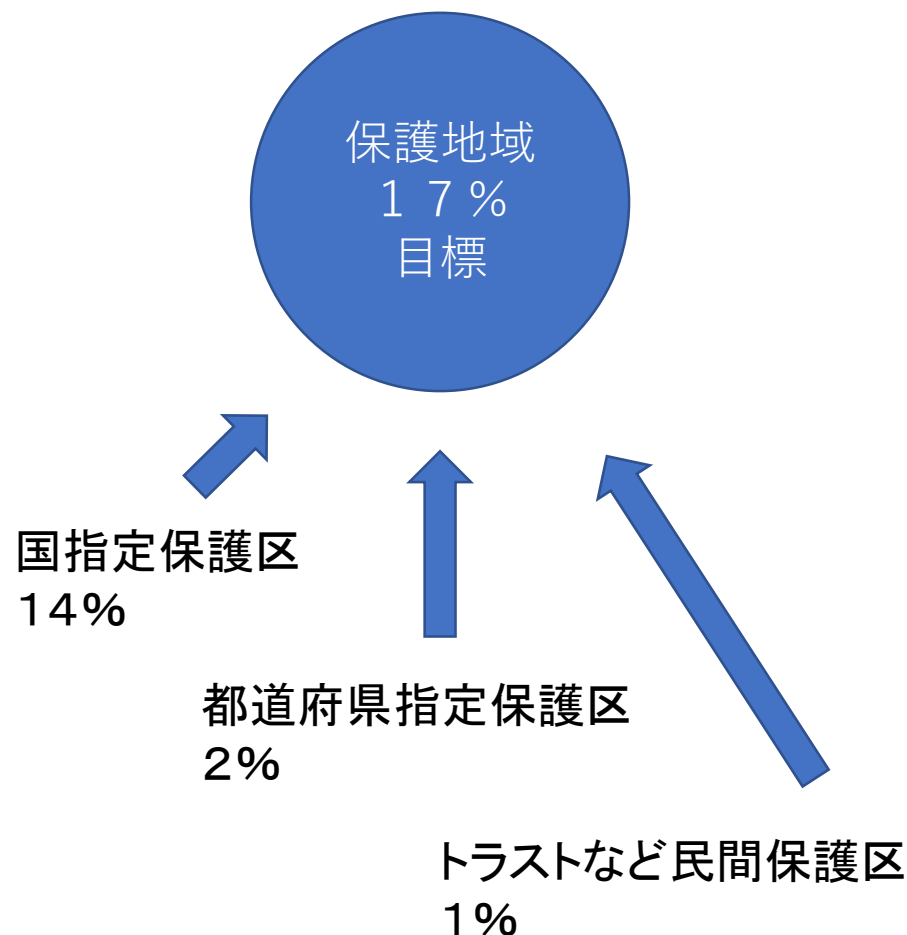
- 透明性のある実施、モニタリング、報告メカニズム
- **たくさんの注文**：主要なメカニズムとしての生物多様性国家戦略の活用と強化、生物多様性国家戦略に関するガイダンスの強化、国別報告書の活用と仕組みの強化、生物多様性国家戦略と国別報告書の互換性や質の改善、他の環境条約の報告プロセスとの一貫性と相乗効果の改善、他の環境条約の教訓を活かす、共通の報告枠組みや報告システムのモジュール化に向けた条約間連携の改善、モニタリング、ボランタリーコミットメント（*）、遵守メカニズムと透明性（*）、「測定・報告・レビュー・確認の仕組み、透明性のある地球規模での生物多様性の取り組みの累積（Global Stock Take）、反復的で同調的で調整されたレビュープロセス、ラチェットメカニズム（後戻りしない仕組み）（*）」、ピアレビューなどの既存の仕組み、ガイダンス

(*)が記されている要素は、意見が分かれるなど注釈付き。また、下線太字は、新規要素(IUCN-J)しらべ。

2. 注目したい動き

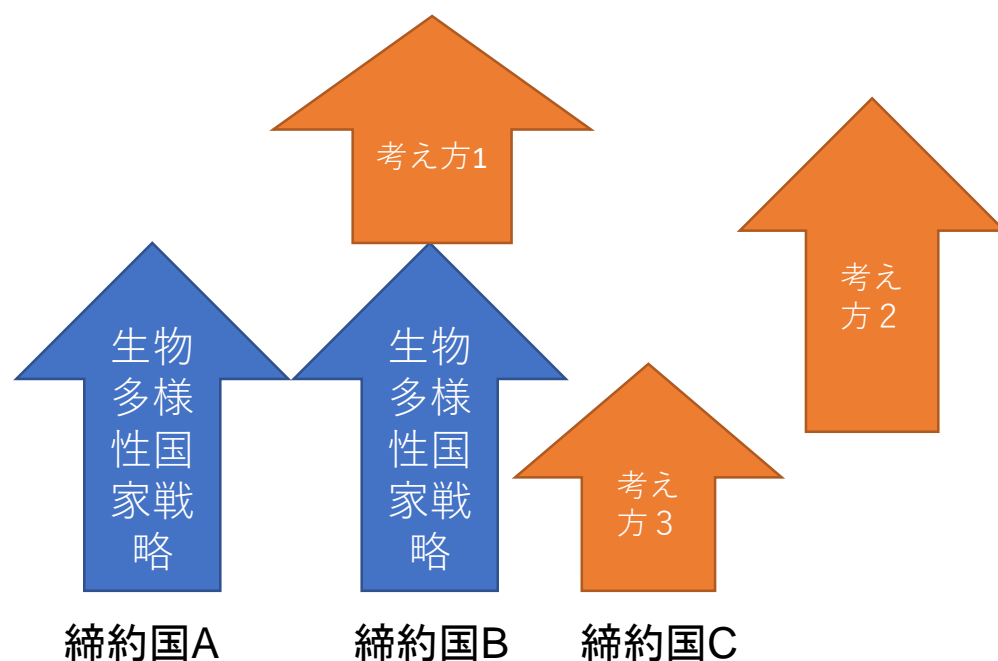
- ジェンダー・ユース・先住民（IPLC）視点の配慮
- IPBESアセスメントをベースとした目標構築の合意 → Transformative Changeという視点や、「陸や海の利用の適正化」を焦点にする
- 目標だけでなく、実施メカニズムへの注目が高く、パリ協定の成功をCBDでも活用。サイエンスベースドターゲットとボランタリーコミットメント（解説）
- **主要なメカニズムとしての生物多様性国家戦略の活用と強化、生物多様性国家戦略に関するガイダンスの強化、**という視点が実施の要素に入った。（解説）

サイエンス・ベースド・ターゲット



- パリ協定をきっかけに、Science-Based Targets Networkが設立されている
- 数的で、測定可能な目標設定、かつ、地球規模＞広域＞国＞民間等の規模に合わせた細分化⇔集約化を可能とする目標
- 民間の貢献領域“も”、可視化することで、非政府アクターの行動活発化を促す効果
- 絶滅危惧種、生態系という切り口でIUCNも提案を準備中

ボランティアコミットメント



1. 締約国による、生物多様性国家戦略に、“加えて”行われる公約→更新手続き簡略化
2. 締約国とは異なるアクター (Non State Actor Contribution)による公約→多様な資源確保
3. 締約国による、生物多様性国家戦略に“代わって”行われる公約→？ (少数意見)

目標設定の意欲度を高める仕組みとして

生物多様性国家戦略強化の視点

そもそも、、、

- 2010年時点 – 170カ国がNBSAPを作成。ただし、改定していたのは19カ国（採択から17年。加盟国の9.7%が見直し）
- 2018年時点 – 190カ国がNBSAP作成。愛知ターゲットにあわせたNBSAPを、140カ国が提出
- 愛知ターゲット採択から、**8年で70%が見直し。見直しを生物多様性日本基金が大きく後押し**

生物多様性条約ウェブサイトを元にIUCN-Jまとめ（2018年11月しらべ）

		日本の評価(2018)	IPBES(2019)	GB04(2014)
戦略目標A	目標1	価値の普及	2	2
		対策の普及	2	2
	目標2	計画への組込	2	2
		会計への組込	2	1
		報告への組込	2	2
目標3	負の誘導措置の除去	0	1	
	正の誘導措置の導入	0	2	
戦略目標B	目標4	持続可能な消費	0	2
		生態学的制限の中での活用	0	1
	目標5	損失をゼロに	2	1
		劣化や断片化をゼロに	2	1
	目標6	持続可能な収穫	0	2
		回復計画の導入	0	2
	目標7	漁業の改善	0	1
		農業の持続可能性	2	1
		養殖業の持続可能性	2	2
	目標8	林業の持続可能性	2	2
汚染の防止		1	1	
目標9	栄養塩流入の抑制	1	1	
	優先度決定	2	3	
	侵入経路特定・優先付け	2	0	
	定着した種の駆除	2	1	
	侵入経路の管理	2	1	
目標10	サンゴ礁への圧力最小化	2	1	
	その他の脆弱な生態系への対策	2	1	
戦略目標C	目標11	海洋保護区面積	2	3
		陸上保護区面積	2	3
		重要生息地の保護	2	2
		生態学的代表制	2	2
		効果的な管理	2	2
	景観への統合	2	2	
	目標12	絶滅防止	2	1
危機ステータスの改善		2	1	
目標13	栽培品種の多様性保持	0	2	
	家畜品種の多様性保持	0	2	
	野生原種種の多様性保持	0	2	
	価値ある種の多様性保持	0	0	
戦略目標D	目標14	遺伝的かく乱の最小化	2	2
		生態系サービスの回復	2	1
	目標15	先住民等への配慮	2	0
生態系レジリエンスの強化		2	0	
戦略目標E	目標16	15%の復元	2	2
		名古屋議定書の発効	3	3
	目標17	名古屋議定書の実施	3	2
		国家戦略の策定	3	3
		国家戦略の法的位置づけ	3	2
戦略目標F	目標18	国家戦略の実施	3	2
		伝統的知識の尊重	3	2
	目標19	伝統的知識の統合	3	0
		先住民共同体とのパートナーシップ	3	2
目標20	科学技術の改善と共有	0	2	
	科学技術の応用	0	3	
	目標20	自然動員	0	2

愛知目標の正式評価は、2020年5月発表予定

＜過去の様々な評価＞

- 2014年の評価（見込み）として、地球規模生物多様性概況第4版（国レビュー）（右）
- 2019年IPBESグローバルアセスメント（科学者レビュー）（中段）
- 日本政府が提出した国内実施状況の報告（第6次国別報告書）（日本政府レビュー）（左）
- 緑 = 達成、黄色 = 進展あったが達成には不十分、赤 = 進展なし、後退、灰色 = 目標設定なし/評価不能
- **評価軸や評価者等が異なるため、単純比較できないことに注意**

波及効果の高い目標の1位と3位について 、目標設定せずに、目標達成を目指す国家戦略だった

1位 ターゲット2（各種計画・会計制度に生物多様性の価値を組み込む）、ターゲット20（資源動員）

3位 ターゲット17（参加型・効果的国家戦略の策定）、ターゲット3（悪影響のある補助金の撤廃）、

5位 ターゲット19（生物多様性の知識や技術の改善）

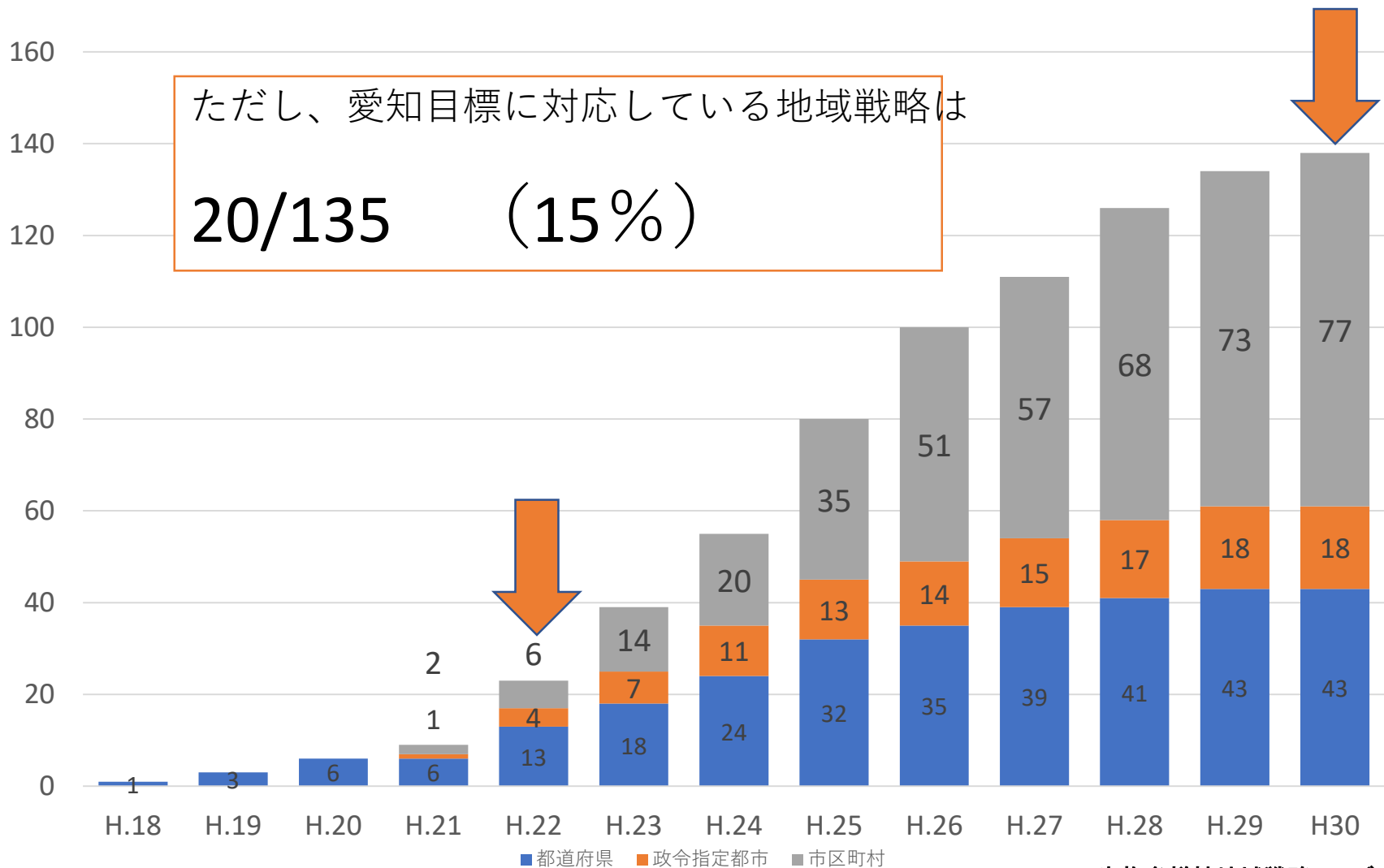
6位 ターゲット1（生物多様性の価値や行動の認識）

9か。濃い色ほど
良い影響を表す

T19

T20

生物多様性地域戦略 日本の策定状況



生物多様性地域戦略のレビュー

<https://www.env.go.jp/nature/biodic/lbsap/review.html>



第4回パートナーズ会合

10年の振り返りと 日本から世界に発信する新しい協働

2020年1月12日(日) 13日(月・祝)

名古屋国際会議場 (生物多様性COP10会場)



*詳細は随時発表

環境省・愛知県・名古屋市・UNDB-J主催「UNDBせいかりレーキックオフイベント」との連動企画



ご清聴ありがとうございました



事務局：
（公財）日本自然保護協会
東京都中央区新川1-16-10
ミトヨビル2F TEL 03-3553-4101
担当：道家 iucnj@nacsj.or.jp